

事例：鴻ノ池スポーツクラブの運営

渡邊 将司¹⁾ 秋田 真介²⁾

1) 茨城大学 2) 鴻ノ池スポーツクラブ

1. はじめに

奈良県奈良市にある鴻ノ池スポーツクラブは、陸上競技を中心としたクラブである。本特集では、編集委員である筆者がクラブの代表である秋田真介氏にインタビューする形式で、クラブの設立の経緯や運営等について尋ねた内容をまとめた。学校部活動が徐々に地域に移行するにあたり、すでにクラブを立ち上げている方々、これからクラブを立ち上げようとしている方々、そして学校で指導にあたっている先生方にとって有益な情報となることを願う。

クラブの設立と当初の様子について

—— 設立は2003年とのことですが、どのような経緯でクラブが立ち上がったのですか。

秋田 実は私は立ち上げの中心的なメンバーではなかったです。その頃、総合型地域スポーツクラブの立ち上げが活発だった時期で、知り合いに指導者として誘われたのが携わるきっかけでした。当時から奈良市内でも陸上部が無い学校が多かったので、子ども達の活動の場を作りたいかかったという思いが強かったです。

—— クラブの存在をどのように告知したのですか。

秋田 ホームページを作ってビラを配ってとやっていた。滑り出しは5名以下だったと思います。最初はそんな状態でしたが、口コミや友達紹介などで少しずつ増えていきました。現在は、小学生から高齢者まで合わせて150～160名が在籍しています。

—— 当初はどのようなことに苦労しましたか。

秋田 やはり会費収入です。最初の2～3年はチケット制で実施していました。1回500円だったと思います。会員も収入も少なかったのです。立ち上げの初期は私が一人で指導をしていました。

現在の指導の様子について

—— 普段の練習について教えてください。

秋田 練習は基本的に鴻ノ池陸上競技場（ロートフィールド奈良）です。練習は週に3回（火・木・土）で、いずれも17時からの2時間です。小学生は複数の指導者で子ども達の面倒を見ながら、様々な運動に挑戦させています。中学生以上は子ども達の意向や特性に合わせて、短距離・中長距離・跳躍・投てきブロックに分かれて練習しています。それぞれのブロックには主任コーチがいます。メイン競技場ではナイター照明を使えるので辺りが暗くなっても練習できますが、芝の使用制限や安全の管理上、投てきの種目の練習内容は限られてしまいます。中学生は砲丸投げ中心に練習していますが、高校生は円盤投とやり投にも取り組んでいます。跳躍も主任コーチの専門性から砂場種目中心になっていますが、走高跳に取り組んだ子が過去にはいました。

—— 子ども達の現地までの交通手段や保護者の協力はどのようになっていますか。

秋田 競技場近くの子は、学校が終わったら自転車などを利用して自力で競技場に集まってくる子が多いです。遠くから参加している子も割といます。遠くから来る子は、学校から一旦帰宅し、電車・バス・保護者の送迎などで競技場まで来るので、練習開始時刻に遅れる場合もあります。一方で、練習後に塾に向かう子もいるので、もう少し遅く始めたら良いのかという何とも言えません。クラブを運営したり指導したりするにあたって、保護者の方々をお願いしている仕事は特にありません。

—— 指導者がいなくて練習を休みにしたり、フリー練習にしたりするようなことはありますか。

秋田 それはありません。主任コーチは指導熱心なのでほぼ毎回の練習に出席してくれます。もし欠席する場合には、各ブロックにいるアシスタントコーチが対応しています。

—— 多くの指導者によって成り立っているようですが、どのように指導者を集めたのですか。

秋田 当初は私の知り合いに声をかけて指導をお願いしていましたが、年月が流れるにつれて、クラブ出身の人達が指導に携わるようになりました。今では約半分の指導者が鴻ノ池スポーツクラブ出身です。みんな昼間はそれぞれの仕事をし、夕方になると指導しに集まってきます。アシスタントコーチはクラブ出身の大学生など比較的若い者達です。

—— 成人の方々への指導はされているのですか。

秋田 毎週月・金曜の午前中には、成人向けの健康づくり教室（ウォーキング・ノルディックウォーキングなどを指導）を実施しています。午後の部の健康づくり教室は子ども達が練習している時間帯に設定し（陸上競技寄りの内容）、親子で運動できる仕組みをとっています。

—— 実際のところスポーツクラブの収入だけで生活していくことはできるのでしょうか。クラブの運営について詳しく教えてください。

秋田 クラブの収入は会員からの年間登録費と月々の活動費のみです。4月は出費が大きくなるので、4月入会者の年間登録費は12,000円で1カ月ごとに1000円ずつ減額しています。つまり3月入会者は1000円になります。月々の活動費は5,000円（家族会員は一家族11,000円）です。それとは別に保険費（小中学生は800円/年、高校生と成人は1,850円/年）を集めています。ここから競技場使用料やコーチ費用を支出しています。そうすると儲けはあまり多くなく、クラブだけで生活していくのは厳しいです。私も他に仕事をしていて、クラブ運営は副業となりますが、働き度合いは本業以上です（笑）。

—— 会費の設定は難しかったと思うのですが、どのような経緯で現在の設定になったのですか。

秋田 最初にも申し上げた通り、当初は1回500円のチケット制でした。この場合、収入がかなり不安定で、クラブを維持していくのは難しいと思っていました。大きな転機となったのは、totoから助成金（スポーツ振興くじ助成）をいただいたことです。この支援を受けたことで、経済的に自立して運営していくための料金が明確になりました。助成が終わってから会費を引き上げる形になりましたが、クラブを継続するために必要である旨を説明することで納得してもらえました。その際、特に反対意見があったり会員が減少したりすることはありませんでした。

今後の課題について

—— 学校部活動が地域に移行される方向になっています。まずは休日から地域移行が始まる計画ですが、子ども達が学校の指導者とクラブの指導者との間で板挟みになって辛い思いをすることは避けるべきだと思っています。クラブの指導者として学校の指導者との連携はどのように取っているのでしょうか。

秋田 私自身、中学生や高校生の大会役員として顔を出すので、クラブに所属している子ども達が通う学校の顧問とも面識があり、良好な関係を保っていると思います。学校の部活動に所属している選手には、基本的には「その学校での練習がメインだよ」と私が指導している子には言っています。県内の先生方に鴻ノ池スポーツクラブを認知して頂いているためか、クラブの活動日には学校の部活を休んでこちらの練習参加を認めて下さる先生が多く、ありがたいです。そういう子が通う学校の顧問の先生とは特にコミュニケーションをよくとって、練習の現状などを伝えるようにしたり、学校での練習の様子を伺ったりしています。こちらから個別の練習メニューを提案することはしません。

—— 現在の課題は何かありますか。

秋田 中学生以上になるとそれぞれのブロックに分かれるので、練習が専門的になっていきます。他の種目や他のブロックでやっている練習を経験する機会がほとんどないので、その子に本当に合った種目を発見する機会は乏しいように思います。

2. おわりに

学校部活動が地域に移行するにあたって大きな問題の一つとして取り上げられているのは、指導者の確保だろう。今回のインタビューにおいて、クラブは選手だけでなく、将来の指導者も育てる役割もあるという構図が明らかとなった。それぞれの地域においてこのような望ましい循環が起きていることを期待したい。そのためには、拠り所となるようなクラブの雰囲気や、指導者と選手・保護者との良好な関係を築くことが重要であろう。併せて、指導者同士のコミュニケーションの重要性も改めて認識できた。指導者の意見の食い違いで、最も不利益を被るのは選手自身である。指導者同士が同じ方向性で育成することを期待したい。その目安となるのが、日本陸上競技連盟が策定した競技者育成指針である。読者の皆様にはぜひお目通しいただきたい。

学校部活動は、長きに渡って学校教員のボランティア精神で成り立っていると言って過言ではない。今回のインタビューでは、学校を活動の主体とした取り組みに関しての有益な情報は提供できなかったが、いずれにしても指導者の確保は急務であろう。このように外部指導者に依存する風潮があるが、ある地域では、コーチ資格を有する学校教員は、これまでの部活動と同様に、学校を活動の主体として休日も指導ができることを発表している。つまり熱意のある指導者はそのまま勤務校で指導できるということである。

学校部活動は、近い将来には平日も地域に移行することになるだろう。今後は、そもそもの在り方について議論が進んでいくに違いない。このような大きな転換期にある今、我々陸上競技に関わる者は、少なくとも競技人口が減少しないように努めなければならないと感じた。